



## 2000年からの 歯学部附属病院は！

新潟大学歯学部附属病院長 河野正司

社会はいま大きな変革期をむかえており、医療の場においても、超高齢社会の到来、疾病構造の変化、地域住民の疾病に対する意識変化、価値観の多様化などが生じています。これに伴い、歯科医学教育においても量から質を考えた卒前臨床教育、卒直後臨床研修、さらには生涯教育の充実が求められております。

また、このような医療に対するニーズの変化と共に、国立大学はその存在意義を問われ、大学の形態を独立行政法人化へと変革をもせまる外圧が、我々に対して押し寄せてきています。

この時点において、教育病院、地域基幹病院、高度先進医療病院の拠点である新潟大学歯学部附属病院はどのようにあらねばならないのでしょうか。新潟大学歯学部を構成している皆さんに、同じ問題を問いかけてたいと思います。

### I . 歯病のあるべき姿

現在の医療はエビデンス・ベースド・メディシンに基づいたものとして実施されています。このエビデンスについては、われわれ医療人が持っているエビデンスのほかに、医療が施される患者、すなわちわれわれのクライアント（お客さん）側にも当然な事ながら医療を受けるエビデンスが存在しています。

翻ってこれまでの医療を考えると、われわれの医療を構築していたエビデンスは、そのほとんどがわれわれ医療人側のものでしかなかったという反省が生じてきます。すなわち、我々医療人の都合のみにあわせた治療を行ってきたのではない

か、という反省です。

医療は国民のニーズの基に存在することから、われわれはクライアントである患者の側に立った病院を構築していかななくてはならないでしょう。

環日本海における拠点病院であらんとしている本学歯学部附属病院は、歯学部学生、卒後研修医および歯科医師の生涯教育のための教育病院であります。また、地域の健康管理を担う基幹病院であり、さらに、先端医療技術を駆使した専門性を有する高度先進病院でもあります。これらの多面的機能を有する本院において、共通する理念として、「患者の立場」（クライアント・ベース）、「科学的根拠に基づいた医療」（エビデンス・ベース）そして「病気と健康の認識」（オーラルヘルスケア）が挙げられましょう。

### II . 歯学部附属病院の存在意義

#### 1 教育病院として

大学に附属する病院であるから、まず教育病院として成り立っていかなくてはなりません。

その目標とするところは、複数の専門領域にわたる学識を統合する能力と、常に自己研鑽し続ける能力を持ち、優れた医療倫理観を有する全人的な歯科医師を育成し、社会に輩出することにあります。

この目的のために本院において、医員、教官、技官、事務官で構成される人的資源が量的・質的に、さらには施設が、教育病院として必要十分に鍛え上げられている必要があります。これがあってはじめて、教育病院として必要な患者さん

にも来院して戴けるようになるでしょう。

## 2 地域基幹病院として

地域住民を中心とした診療システムを構築することにあります。患者さんの立場に立った、分かりやすく、効率的で、安心できる病院であることが求められています。

そのためには、歯病は具体的に次のような事項を実現していく必要があります。

- 1) 疾患部位別の治療体制への変換
- 2) 通院困難な方への対応
- 3) 広域・国際的医療貢献
- 4) キュアからケアへの変換
- 5) 病診（本院と開業医院との）連携の強化

## 3 高度先進病院として

本学歯学部は顎顔面口腔領域における生命科学の成果、特に骨・硬組織の発生・加齢学研究、顎顔面機能研究、炎症・腫瘍に対する免疫、遺伝子研究といった成果を、臨床の場に展開して、地域住民のみなさんに還元していかなくてはなりません。これが本院の使命、責務であり、国立大学附属病院の存在意義そのものでもありましょう。

- 1) 歯および歯周組織領域（歯系）の構造的、機能的再生・再建、
- 2) 顎顔面領域の器官の構造的、機能的再建、
- 3) 高齢者、有病者、心身障害者に対する医療です。

これらの特徴的な高度先進医療を、充実、発展させることがわれわれの責務です。

## III. 2000年からの歯病

病院が上述した機能を持ちながら活動していく過程で、われわれは患者数という形で、国民から具体的な評価を受けることとなります。

国民のニーズに答えた歯病であれば、自ずから患者さんに受け入れられ、認めていただけること

から、患者数の増加という形が表れてくるはずで

す。  
国立大学が独立行政法人化に進んだときに、附属病院は当然のことながら企業型の経営を押し進めていかななくてはなりません。

しかし、本院が教育病院と高度先進医療の実践という使命を果たしながら運営されていくときに、企業型の経営とは必ずしも独立採算型の運営を意味するものではないと考えます。教育病院としての機能、そして高度先進医療の開発は、決して採算ベースで論じられるものではありませんし、そうあってはならないと考えます。

これらの部門が赤字を背負うことは間違いないでしょう。その時に、わが歯病がこれらの部門の赤字に負けないだけの、教育病院としてのさらには高度先進医療病院としての機能を営んでいけば、この赤字に国民は納得してくれるはずで

す。  
そのためには、次代の高度化した歯科医療を担う、十分な学理と技能とを持った、能力豊かな歯科医師を、新潟大学歯学部が輩出し続ける必要があります。さらにまた、本院が高度医療の開発と実践を先進的に行っていることを、国民の目に見える形で、しかも具体的な形として示す必要があります。

これらを実現するための1つとして、現在本院は診療科の構成について、われわれのクライアントである患者さんにわかりやすい形に、大診療科の形態へと再編成していくことを計画中であります。

しかし病院の改革は、診療科の再編成というハードの改革だけで行えるものではありません。病院の将来は、当然のことながら歯学部を構成するみなさんの双肩にかかっております。このために、皆さんと共に意識を改革していくことと、積極的に活動することが今求められています。

皆様のご協力をよろしくお願いいたします